



大学入試改革の進捗と 高大接続に関する大学への期待は？

高等教育局 大学振興課
大学入試室 室長
田島 博樹

たじまひろき●2006年文部科学省入省。研究開発局環境エネルギー課課長補佐、初等中等教育局児童生徒課課長補佐、同教育課程課専門官、研究振興局大学研究基盤整備課大学研究力強化室専門官、在ジュネーブ国際機関日本政府代表部一等書記官などを経て、2025年より現職。

——大学入試改革の進捗に対する認識は？

小中高でバランスよく伸ばした学力の三要素を、大学入試で総合的に評価し、大学教育に引き継ぐという高大接続の理念は、徐々に理解が広がってきたと思います。共通テストでは思考力・判断力・表現力を重視する出題がなされ、センター試験とは明らかに変わりました。

2025年度入試から導入された「情報」は、共通テスト受験者の65%以上が受験しており、定着してきていると考えます。デジタル化が進む時代に、その土台となる能力を入試で評価する重要な一歩です。大学側が個別に問題を作る負担は大きく、共通テストで質の高い問題が出題されることにより、その利用ができることはありがたいとの声もいただいています。

各大学の個別試験でも、学力の三要素を多面的・総合的に測る総合型選抜や、英語4技能を外部検定試験の結果で評価する入試、多様性を確保するための取り組みなどが着実に広がっています。一方で、大学には、3つのポリシーの実質化が求められています。例えば、アドミッション・ポリシーが入学者選抜にどう落とし込まれているか。その精緻さは、大学によって差があるように感じます。また、入試方法を総合型、学校推薦型、一般と区分したことには明確な意図があります【図表5】。総合型の入試開始時期が早いのは、受験者一人ひとりの丁寧な評価に時間をかけるべき入試だからです。単に募集時期を早めただけのような、本来の趣旨とは異なる運用も残念ながら見受けられます。

——年内入試のルール変更の内容は？

学力検査が評価の大半を占める、一般選抜に近い形の学校推薦型・総合型の入試について高校関係団体などから問題が提起され、本省が設置する大学入学者選抜協議会で議論しました。総合型の趣旨は意欲や適性を丁寧に見ることです。「学力型」と銘打ち、学力を主たる評価対象とする考え方は、趣旨と矛盾しています。2024年12月に、学力検査は2月以降の実施を遵守するよう通知を出し、その後2026年度入試においては、小論文や面接と組み合わせて多面的・総合的評価を行うことを条件に、2月以前の学力検査の実施が認められました。しかし、なお「実質的な一般選抜」が行われている状況に鑑み、総合型、学校推薦型では面接を必須とするルールを設けることになりました。各選抜の趣旨をふまえた入試の実施を願っています。

——大学入試、高大接続の今後の課題は？

進学者減時代の大学経営を考えると、入試の設計はますます重要になります。なぜなら、入試の質の向上が教育の質の向上、育成する人材の質の向上につながり、さらに自学の価値を高め、

それが経営に安定をもたらすからです。

高校教育、入試、大学教育はつながっています。入試の質の低下は高校の教育の質を損ね、結果的にそれを大学で補填することになるでしょう。逆に、大学が高校教育を理解し、そこでの学びを基盤として、大学教育の質をいかに高めるかという視点で考えれば、その両者をつなぐ入試の質も必然的に高いものになるはずです。少子化が進む中では、とにかく多くの受験者を集めて選抜を行うという考え方だけでは立ちゆかなくなるでしょう。2025年2月の中教審答申にもあるとおり、「知の総和」を最大化するためには、文理横断・文理融合教育の重要性をふまえるとともに、多様な背景を持つ受験者一人ひとりを丁寧に多面的に見て、入学後の教育にもつながる入試を考えていく必要があります。

——大学への期待、メッセージは？

教育の質を高めるためにも経営のためにも、各地域の中で自学がどのような役割を担うのかを正面から考えてほしいと思います。学内だけで完結せず、自治体や経済界、高校などと連携して、地域に必要な人材、小中高も含めた教育のあり方を話し合っほしいのです。

入試は教育活動の一環として行われるものです。どのような大学入試をしたら高校教育と大学教育の質が高まるのか、広く関係者との対話を通して深めることを期待しています。入試科目や評価方法に工夫の余地があるのではないのでしょうか。地域のため、学生のための3つのポリシーを打ち立て、ポリシーと整合した入試を組み立てていく。その積み重ねが、大学に信頼と募集力をもたらすはずです。

【図表5】入試方法（令和9年度大学入学者選抜実施要項）

一般選抜	学力検査、小論文等を主な資料とし、調査書、面接、入学志願者本人の記載する資料等を組み合わせる。
総合型選抜	詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等を組み合わせつつ、以下の点に留意して総合的に評価・判定する。 ①志願者本人の記載する資料（活動報告書、入学希望理由書、学修計画書等）を必ず評価に活用 ②志望する学問分野に対する意欲や適性等に係る面接による評価を必ず行う ③「教科・科目に係る個別テスト」「大学入学共通テスト」「小論文・面接・実技検査等」「資格・検定試験等の成績」のうち少なくともいずれか一つを必ず活用 ④高度な専門知識等が必要な職業分野の人材を育成する学部は、志願者の意欲・適性等を特に重視
学校推薦型選抜	出身高等学校長の推薦に基づき、調査書を主な資料としつつ、以下の点に留意して評価・判定する。 ①面接による評価を必ず行う*1 ②教科・科目に係る個別テスト、大学入学共通テスト、小論文・面接・実技検査等、資格・検定試験等の成績のうち一つ以上を必ず活用 ③推薦書の中に学力の三要素に関する評価について記載

※面接はディベート、集団討論、プレゼンテーション、口頭試問等を含む（オンライン可）
*1 非公募型で、合格した際には入学することを確約して受験するものは、大学が面接の要否を判断できる
*文部科学省「令和9年度大学入学者選抜実施要項」よりBetween編集部にて抜粋・加工